

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

年 月 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職名・学年 助教

氏 名 梶丸 岳

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	ICTMD東南アジア芸能研究グループ第7回シンポジウム			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発表題目	Making Khaen Chet: Local Manufacturing Practices for Making Local Sound			
開催場所	フィリピン・イロイロ州・イロイロ市・Grand Xing Imperial Hotel			
渡航期間	2024年 6月 19日 ~ 2024年 6月 27日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(スライド資料pdf)			
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円		
	使用した助成金額	150,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額(円)	
		航空運賃	79,340	
		宿泊費	76,320	
		滞在費(日当)	90,000	
		学会参加費	10,056	
その他				
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)シンポジウムの方針もあり7日間の全日程参加したため、宿泊費と滞在費がかかり支出は助成金額をオーバーすることになりましたが、おかげで科研もない中でも国際学会に参加することができました。大変助かりました。今回は助成決定から渡航まで間がなく、しかも渡航直前1週間は体調不良でほとんど出勤していなかったこともあって、帰国後に助成採択通知を受け取ることになりました。できましたら、採択決定次第メールで決定の案内をいただけると助かります。			

成果の概要 / 梶丸岳

今回は令和 6 年度国際研究集会発表助成を利用して、フィリピンのイロイロ市で開催された ICTMD 東南アジア芸能研究グループ第 7 回シンポジウムに参加した。このシンポジウムは研究者同士のネットワーキングも目的としていて公式に「全日程参加が望ましい」とされていたこともあり、1 週間の会期中全日程参加することとなった。このシンポジウムは発表数が例年数十件あるにもかかわらず 1 会場で全員が同じ発表に参加するスタイルを維持しているため、長期間・長時間のシンポジウムとなっているが、その分参加者同士が知り合い議論を行ったり、交流を行ったりする機会が多く、東南アジア芸能研究者の国際的なコミュニティ醸成の重要な場となっている。

このシンポジウムに参加するのは 2018 年以来 2 回目であるが、今回初めて全日程参加して、1 週間同じ場に集まることの意義を感じた。なによりランチやディナーなどの時間に興味深かった発表の発表者を含め様々な研究者と議論や交流を行い、研究の背景についても理解を深めることができた。また土曜日に行われたエクスカーションで共にイロイロ市の文化遺産を見たり、ホストであるフィリピン国立大学が企画した 3 回のコンサートでフィリピンのさまざまな芸能を鑑賞したりといった活動を通して、今回初めて渡航したフィリピンの有形・無形の文化遺産にたいする理解がかなり深まった。また発表の一部として、フィリピンのケソン市で貧しい子供たちへのバレエ教育を通して貧困層のエンパワメントに取り組むダンス教師と生徒たちの生きざまを描いた“A Will To Dream”という民族誌的ドキュメンタリー映画が上映された。2023 年に ICTMD Film or Video Prize を受賞している本作品は、芸能を通じたエンパワメントとは何か、そしてフィリピン都市スラムに暮らす若年層の抱える困難とはどのようなものかがよくわかる優れた作品であり、これもフィリピン理解に資するものであった。上映後は監督の Patrick Alcedo 氏との質疑も行うことができ、日本から参加した研究者たちとも議論が盛り上がり、現在日本での上映可能性について模索しているところである。

今回私自身は”Making Khaen Chet: Local Manufacturing Practices for Making Local Sound”というタイトルで、ラオスの民族楽器ケーンのうち「ケーンチェット」という種類のケーンの製作方法について発表を行った。これは従来東北タイで記述され研究されてきたケーンペットという種類のケーン研究を参照しつつ、それとの差異を現地調査データから明らかにするものであった。この研究はラオスの掛け合い歌カップ・サムヌア研究の副産物として生まれたものである。質疑ではケーンペット演奏家で民族音楽学者でもある Chris Adler 氏から、文献だけではわからなかったケーンペットの多様性や音響的特性についてコメントをいただくなど、非常に有益な質疑を行うことができた。その成果は今後プロシーディングス論文のなかに反映させていく予定である。

私の研究に近い発表としてはチュラロンコン大学の大学院生 Pachaya Akkapram 氏の発表があった。これは氏の出生地である東北タイ文化と、氏の教育上のバックグラウンドであるコンテンポラリーパフォーマンスを結び付ける試みであり、私の研究対象でもあるカッ

プラムが見事にコンテンポラリーダンス的な演劇のなかに組み込まれている舞台の紹介であった。東北タイはラオスの主要民族と同じラオ族が多く住む地域で、ラオスとの文化的共通性も高いのであるが、タイとラオスの文化的状況の違いについて改めて深く感じ入らずにはいられなかった。なお、氏は今後さらにラオスのアーティストとの協働も考えていきたいとのことであり、発表後の議論から、今後も継続的に研究交流を深めていこうということになった。他にもアメリカのデイトン大学教授 Heather MacLachlan 氏の、青年が意中の女性の家の前で歌を歌うというミャンマーの恋愛習慣が現代どのように変化しているかについての発表も、私が長年取り組んでいる掛け合い歌研究への示唆に富むものであった（なお、上記のコンサートの後で戻るホテルを間違えて、二人で互いの研究や家庭事情などを話しながら宿泊先のホテルまで歩いたのも良い思い出であった）。

また、こうした国際学会は主に海外で活動してきた日本人研究者と交流するいい機会ともなる。今回も国内学会では出会わない、そうした日本人研究者と何人も新たに知り合うこととなった。研究交流を国際的に広げていくうえで、海外で活動する日本人研究者との結びつきを深めることは非常に有益であり、今後ともここでできたつながりを深めていきたいと考えている。

以上述べてきたように、今回支援いただいた国際研究集会発表はさまざまな面から見てたいへん有意義なものとなった。現在競争的資金を一切持っておらず、予算的に厳しい中、本助成によって渡航・滞在費の大半を賄うことができたのは非常にありがたかった。今回のシンポジウム参加を契機に、コロナ禍や育休などで滞っていた調査研究を改めて推進し、国際的にもインパクトのある研究活動へと繋げていきたい。



写真：初日に撮影された参加者全体の集合写真。前から2列目やや右寄りの、白い服を着て立っているのが申請者。